

日本の「あし文化」の多角的考察

-日本人の「はきもの」の着脱 2-

栗山 緑*

(e-mail : mkuri@fukuoka-u.ac.jp)

<目次>

- | | |
|---------------|--------------|
| 1. はじめに | 4. 現代日本人と上履き |
| 2. 日本人と上履き | 5. まとめ |
| 3. トイレの「はきもの」 | 6. おわりに |

キーワード: はきもの (footgear, shoes, slippers) 、はきもの着脱 (shoes wearing and off) 、上履き (indoor shoes) 、あし (foot, leg) 、あし文化 (foot culture) 、日本人 (Japanese)

1. はじめに

本研究は、人のからだがかもつ文化的独自性を追究するなかで、日本人の「あし」を研究対象としている。先行研究において、日本人の「はきもの」の着脱に関する文化的事象を網羅的に蒐集して論考した¹⁾。そしてその考察のなかで、日本人は「上履き」や「外履き」と言うように、「はきもの」に「上 (カミ) ・下 (シモ) 」文化や「内 (ウチ) ・

* 福岡大学スポーツ科学部。

¹⁾ 栗山緑 (2013) 「日本人の「あし」文化の総合的考察 「はきもの」の着脱 」『比較文化研究』No.109, pp.55-64.

外(ソト)」概念が反映されていることを指摘するに留まっていた。そこで本稿において、上履きに焦点をあててその詳細を究明を目的とした。

上履きに焦点をあてたのは、現代日本人にみる上履き着用に関する行動を再考すると、奇妙とも感じられる行為であることを再認識したからである。それは、訪問先など自宅以外の場所で往々にして見られることであるが、玄関口で「はきもの」を脱いで屋内に入る際、その入り口には当然のようにスリッパが置かれておりその着用が余儀なくされる。しかしこのスリッパは、招かれた部屋が絨毯敷きやあるいは畳の部屋ではスリッパを脱がなければならない。その後、その部屋からでて別の部屋に移動するには再びそのスリッパを履く。その移動先がトイレであると、そこにはトイレ用のスリッパ(トイレ履き)が履きやすいような方向にきちんと並べられており、当然ながらその着用が余儀なくされるのである。あるいはその移動先がその家の中庭の場合、庭専用の共有の「はきもの」が用意され、自分の「はきもの」を玄関から持ってくる手間が省けて便利なのである。

このように、日本人の上履き着用について再考すると頻繁に上履きの着脱を行い、またその目的を意識することなく行っていることに気づくのであるが、何故にこのように何度も「はきもの」の着脱を行っているのであろうか。

この奇妙ともみえる日本人の上履き着用に関して、フランス文学者の多田道太郎²⁾(2002)は、異文化圏からの目をもって「日本の民家の板敷きの上をあるくには、このスリッパという特別の履物がおそらく必要なのであろう。というのは、板の上に特別の薬品でも散布してあり、その上を歩くには、特別の履物が必要なのかも——といった埒もないことを考えながら、さて、トイレの扉をひらくと、-----」といった巧妙な表現を使ってその不思議さを強調し、日本家屋の土間・板の間・畳の間という三種の空間、あるいは三つの段(レベル)に、土足、跣足、そしてスリッパと「足」の三相相を使いわけていると考察を加えている³⁾。

建築学者の沢田知子⁴⁾(1996)は、日本人の「はきもの」の着脱の頻繁性について、日本家屋の土間・板張り床・畳の部屋・廊下・縁側など各所にある微妙な段差が

2) 多田道太郎(1924-2007)。京都大学名誉教授。日常の風俗や雑事から日本文化をとらえる評論でも知られる。主な書籍に「しぐさの日本文化」(筑摩書房, 1972)、「複製芸術論」(講談社, 1985)、『からだの日本文化』(潮出版社, 2002)など多数ある。

3) 多田道太郎(2002)『からだの日本文化』潮出版社, pp.159-162。

4) 沢田知子(1942-) 文化学園大学教授。都市・建築計画や建築史を研究分野としている。主な著書に『インテリアデザインへの招待 暮らしの文化に学ぶ』(彰国社, 1992)、『ユカ座・イス座 起居様式にみる日本住宅のインテリア史』(住まいの図書館出版局, 1995)などがある。

境界となって、各領域における空間の上（位）下（位）・清潔感・浄不浄観という位置づけから「はきもの」の着脱（沢田は「履き替えの作法」と表現している）を行い、各領域を使い分ける行動を誘発させてきたと述べている⁵⁾。

トイレ履きについては、住宅学者の遠州敦子⁶⁾（1996）も多田（2002）と同様に、日本家屋の床との関係から分析し、トイレ（厠）や風呂場の床が上床でもなく土間でもない第三の床を持ち、住宅内最小の空間にもかかわらず不思議な性格ゆえにこの床とのつきあいに苦勞してきたと述べている⁷⁾。そして、「歩く」機能をほとんど果たし得ないトイレ履きの存在について考察している。

以上のように、日本人の上履き着用不思議に関しては、日本家屋の構造に関係したものであることをいくつかの先行研究が考察されている。そこで、本研究の手法としての日本人の「あし」から上履き着用についての考察を論考する。

2. 日本人と上履き

日本人は屋内では「はきもの」を脱ぐ習慣がありながら、上履き着用も平行して行われていることをスリッパを例に前章でとりあげたが、現在日本人が上履きとして着用しているスリッパ⁸⁾は、明治期に入ってから日本に導入され戦後になって広く一般家庭で着用されるようになったものである⁹⁾。しかし、日本人の上履き着用の始まりは古く、中世期の

5) 住友和子編集室・吉村明彦（1996）『日本人とすまい①靴脱ぎ Kutsu-Nugi』リビングデザインセンター株式会社，pp.26-27.

6) 遠州敦子（1954-）仏教大学助教授。家政学・生活科学一般が研究分野である。主な著書に『住居空間における家具占有面積』（日本建築学会論文集報告『物語ものの建築史 便所の話』（共著、鹿島出版会、1986）、『日本トイレ博物誌（第三空間選書）』（共著、INAX、1990）がある。

7) 前掲書，住友和子編集室・吉村明彦，p.86.

8) 「日本では、踵の平らな足先から甲の部分を覆った後掛けのない室内専用のサンダル式の「はきもの」をさすが、このようなスリッパは正確にいえば、バスルーム・スリッパ（bath slipper）やベッドルーム・スリッパ（bedroom slipper）あるいはスカフ（scuff）にあたる。スリッパとは、一般に踝より浅いものでヒールの高低も様々で、バレエ・シューズ（ballet slipper）やオペラ・パンプス（opera pumps）などもスリッパの分類に入る。」（『日本大百科全書』Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=1001000131177>、参照 2016.5.5.）

9) 明治期の文明開化とともに登場したスリッパはまず上流家庭で用いられ、大正期になって洋風化への羨望とともに中流家庭へと広まった。前掲書，住友和子編集室・吉村明彦，p.92.

絵巻物（『慕婦絵詞』1351年作）に確認できるのである（図1）¹⁰⁾。



（図 1）

住友和子編集室・吉村明彦（1996）は、この絵のなかの草履に「縁側の汚れを畳に持ち込まないためのもの」説明している¹¹⁾。確かに、日本家屋の縁側には壁がなく外界と直結した場所なので、砂ぼこりなど足は汚れることが多かったに違いなく、その汚れを畳に移さないための目的も考えられるが、この絵の説明書きは「簀子の上には、竹を編んだ上履草履が並んでいる。竹杖庵主宗昭を象徴する絵師の、心配りか」¹²⁾とあり、実際にはこの場にはないものを絵師が描き足しているということなのである。この絵巻物にみる日本人の屋内における足もとは一様に裸足で、「はきもの」を履いているものはほとんどなく、脱履の習慣はすでにこの時期には確立されていたこともわかるのであるが、それと同時に上履草履が描かれている場面もほとんどなみあたらないことから、例外的に着用する場合があったのであろう。この絵にある上履草履は絵師の心配りとあることから、竹杖庵主宗昭の坐す畳が

10) 小松茂美編（1985）『慕婦絵詞』続日本絵巻大成 4、中央公論社、p.70.

11) 前掲書、住友和子編集室・吉村明彦 p.92.

12) 前掲書、住友和子編集室・吉村明彦 p.71.

汚れないようにという意図の推測も可能であるが、他の目的の推測も可能であろう。それは、この絵（図1：『慕帰絵詞』第八卷十四紙）の続き（第十五紙）には、満開の桜の木が描かれており、説明分にも「春爛漫。霞があたり一面に立ちこめて、桜花が咲き乱れる」とあり、まだ寒さの残る肌寒い桜の時期なので板張りの床の縁側を歩く際の足の寒さを配慮した気配りではないという推測である。

この推測に至ったのは、「足袋御免」という同時期（室町時代）に制定された制度の存在である。「足袋御免」とは、武家社会では足袋を履くことが許される期間が10月1日から翌年の2月20日までと決められ、50歳以上の者もしくは病弱の者は願い出ることによって足袋をはいての殿中の出入りを許可したものである¹³⁾。すなわちこの制度から、初秋から冬季の殿中は非常に寒かったということなのである。

武士ではない宗昭が足袋を履く場所や時期に考慮は不要であるが、この場面の宗昭は座した姿であるので足袋を履いているかは不明である。しかし、そうであったら上履草履を描き足す必要もないので、住友らの指摘通りの衛生目的だといえるが、宗昭の足元が見えない分、保温目的の上履きである可能性も否定できないであろう。

この日本人の上履き着用は、時代を下った大正・明治期の生活風景図にも主婦が板張りの床の台所で草履を履いている挿絵¹⁴⁾があり、また、現代でも寺院の僧は板張りのところでは草履を着用していることから、その目的はともあれ日本人は板張りの床の上では上履きを着用してきた歴史があるのだ。

ここで、「上履き」という語の意味が「廊下、板の間など、建物の中で使うはきもの」¹⁵⁾とあることも再認識させられるのであるが、日本人の上履き着用には日本家屋の構造上の特徴との関連が深い。現代日本人が廊下でスリッパを履く習慣は、長い歴史に育まれた経緯があり、上履き草履がスリッパという洋式の「はきもの」にとって代わられていたということなのである。

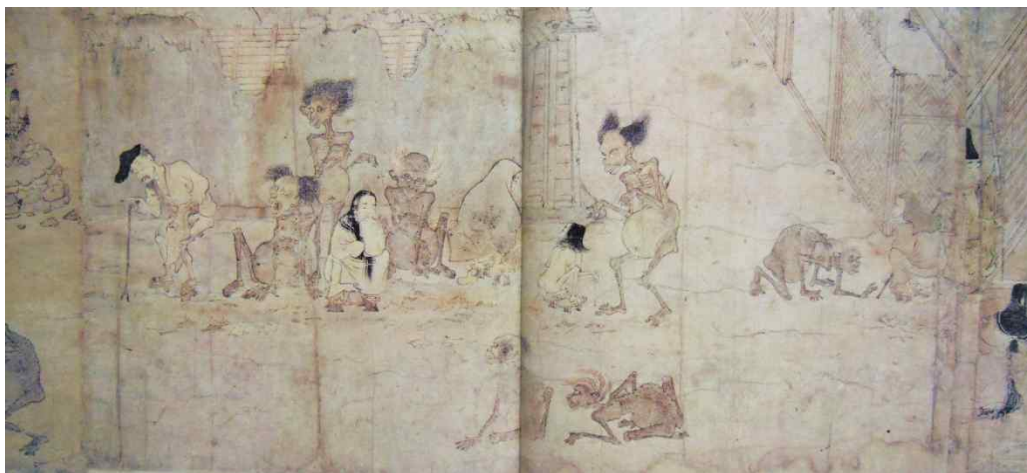
13) 『日本国語大辞典』Japan Knowledge (前掲 website <http://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=200202a67b4a9pX98u4W>, 参照 2016.5.7.)

14) 竹内重雄 (1987) 『大正風景スケッチ 東京あれこれ』(国書刊行会株式会社, p.137) や平出鏗二郎 (1983) 『東京風俗志』(日本図書センター, p.78) などがある。

15) 『日本国語大辞典』Japan Knowledge (前掲 website <http://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=20020074d535753C2798>, 参照 2016.5.20.)

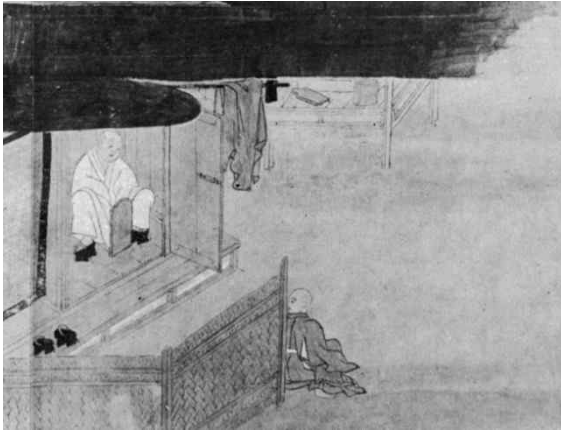
3. トイレの「はきもの」

次に日本のトイレ用の「はきもの」の「トイレ履き」についてであるが、先行研究の一つとしてあげた遠州（1996）は、歩くことを目的としない今日のトイレ履きがなぜ存在しているかについて、四つの視点から考察している。それによると、平安期の絵巻物に当時の公衆便所ともいべき道端の隅で、人々が高下駄を履いて排泄行為を行っていることを皮切りに（図2）¹⁶、南北朝期の絵伝には寺院のトイレ（厠）で僧侶が高下駄を履いていることや（図3）¹⁷、鎌倉期の禅宗の指南書に明確に厠専用の「はきもの」の着用が指示されていることをあげ¹⁸、日本人は古くから排泄行為の際には専用の「はきもの」を着用していたことを指摘している¹⁹。



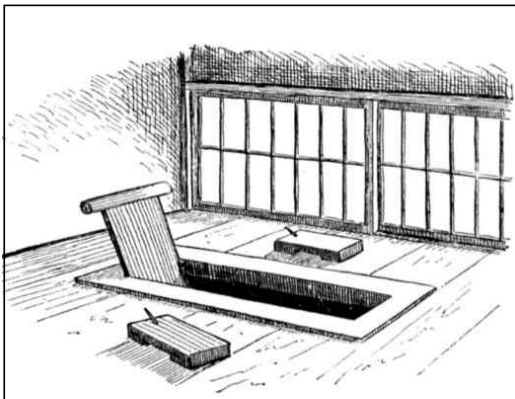
(図2)

- 16) 小松茂美編 (1987) 『餓鬼草紙 地獄草紙 病草紙 九相詩絵巻』日本の絵巻7, 中央公論社, pp.6-7.
- 17) 『弘願本法然上人絵伝』の「厠の念仏」図。(真保亨編 (1974) 『法然上人絵伝』(日本の美術第95号) 至文堂, p.62)
- 18) 「厠門(しもん)のまへにして換鞋(かんあい)すべし。蒲鞋(はあい)をはきて、自鞋を厠門の前に脱するなり。これを換鞋といふ」(増谷文雄 (2005) 『正法眼蔵(一)』講談社, p.116)、現代語訳: 厠の入口では履物をかえるがよい。厠の蒲草履をはいて、自分の草履は入口でぬぐのである。これを換鞋という。(前掲書, 増谷文雄, 現代語訳「東司の作法について」 pp.122-123.)
- 19) 前掲書, 住友和子編集室・吉村明彦 pp.86-



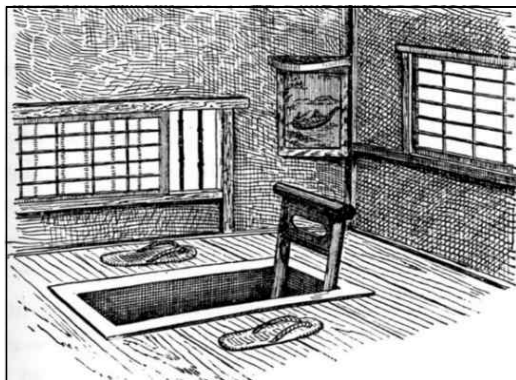
(図 3)

また、そもそも日本の厠は住宅棟である母屋から離れて存在していた時期は昭和初期まで続く長い歴史があり、それはすなわち外履きのままで利用していたことや、住宅内に厠が組み込まれてもなお履きを着用していたことを、明治期に来日した動物学者モース (Edward S. Morse ; 1838-1925) の著書の挿絵²⁰⁾ (図 4、図 5) を示して説明している。



(図 4)

²⁰⁾ ‘ Straw sandals or wooden clogs are often provided to be worn in this place.’
[Edward S. Morse (1998) “Japanese Homes and Their Surroundings” : Charles E. Tuttle Company, Inc.,
p.230. (日本語訳：これらの便所には、藁のゾウリや、木のゲタをおく。E.S.モース『日本人の住まい』
八坂書房、p.225.)



(図 5)

そして、このように長い歴史がある排泄行為のための「はきもの」の目的は、一貫して足元と着物の裾まわりを汚さないためのもので、廁の装置としての「はきもの」と遠州 (1996) は述べている。

ここで気づくこととして、多くのアジア圏では日本人のように排泄行為の際にしゃがみ姿勢で行うのであるが、何故に日本人は「はきもの」を常用するようになったのであろうか。偶然にも高下駄のように一段高く位置することができる「はきもの」が日本だけに存在し、重宝するものであったからかもしれないが、やはり日本人の衛生感覚の高さが要因しているのに違いない。もし、日本の「はきもの」が靴のように足をすっぽりと覆う閉塞型の「はきもの」であれば、高い衛生感覚を満たすものであったに違いない。よって、現代のトイレ履きのスリッパは日本人の要求に適合したもので好まれているのかもしれない。

4. 現代日本人と上履き

では、現代の日本人は上履き着用に関してどのような意識をもっているのであろうか。その一端を垣間見ることができる調査がある。1995 年に行われた 20 世紀後半の日本人の住宅内のスリッパに関する調査で、当時のほとんどの家庭でスリッパを有しており (98.9%、 $n = 350$)、住宅内でスリッパを履く理由の一位は「足の保温」であった (214 人)²¹⁾。そして、二位が「足が汚れるのを防ぐため」 (167 人)、三位が「なんとなく

履くのが当然と思うから」(95人)で回答者の3分の1近くを占めていたのである。この調査結果が発表されたのは2月なので、冬季に行われた調査のゆえに「保温」が第一位の理由となった可能性は大きい。第二位の理由に関しては、現代の住宅内がそれほど汚れているということは疑わしく、ここにも日本人の衛生感覚の高さを反映しているに違いない。しかし最も興味深い点は、ただ「なんとなく」という感覚で履いている人が回答者の約3分の1を占めていたということである。「なんとなく」というのは、特にその目的や理由を意識することなく、スリッパがあるから漠然と着用しているということなのである。20世紀後半の多くの日本人は、漠然と上履き着用していたのであり、それはまさに習慣行為であったともいえる。

トイレ用スリッパを履く理由については、一位が「ただなんとなく」(135人)、二位は「床が汚い」(127人)、三位は「床が冷たい」(66人)で、トイレ履きの着用はまさに無意識下で行われていたのである。二位の理由に関しては、前述の住宅内スリッパの質問と同様に、トイレ内の床もそれほど汚れているとは疑わしい。この調査が行われた1990年代のほとんどの日本の家庭では、洋式トイレが設置されており、和式トイレに比べて衛生環境は良いはずである。ここにも、日本人の高い衛生感覚が関係しているに違いない。三位の理由に関しては、確かにほとんどの日本のトイレの床は裸足にとっては冷たいタイル素材などであることが考えられるが、やはりこの理由も冬季に行われた調査の影響が大きい。

この調査結果から、20世紀後半の日本人にとってスリッパ(上履き)を着用することは習慣的行為であることが明らかになっている。21世紀の現代の日本人の上履き着用に関する意識調査は探さきれてないが、現代日本人の上履きに関する行為に新たな特異性がみられる点がある。それは、20世紀の日本人も行ってに違いないが、職場に着くと職業内容の目的ではなく、ただ個人的嗜好で職場用の「はきもの」に履きかえていることや、現代の多くの日本のホテルでは室内用のスリッパが提供されていることなど、玄関口などのウチとソトの境界で「はきもの」を脱いで上履きを履くように、職場空間や個人の部屋空間という境界を感じれば「はきもの」を替えるのである。現代日本人のこの傾向に、「一空間に一「はきもの」というような規則があるようにさえみえるのであるが、それも生活環境などの社会生活の変化に対応した、日本人が古来から持つ上履き着用に関する習慣の応用に違いない。

21) 大和ハウス株式会社生活研究所(1995年2月)(前掲書,住友和子編集室・吉村明彦 pp.92-93.)

5. まとめ

以上のように、日本人の「はきもの」の着脱を「上履き」から再考した結果、日本人は屋内では脱履の習慣がありながら、それに併行して上履きも着用する慣習もあることをまず明らかにした。そして、上履き着用の要因は日本家屋の構造上にかんけいたものと推定し、トイレ履きに関しては日本人の高い衛生感覚との関係を指摘した。また、長い歴史に育まれた上履き着用は習慣化され、生活環境や社会状況が一変した今日に至って貫かれているのであった。

ここで、あらためて日本人の脱履の習慣について再考するのに有用な調査結果がある。少し古い資料となるが(1977)、住生活と「はきもの」を脱ぐことに関する調査で²²⁾、主婦を中心とした女性を対象としたものである。その質問のなかの室内で、「はきもの」を脱ぐ行為が長く続けられてきた理由として、最もあてはまるものの第一位は「家庭内外のけじめとの関連度」(53.5%)で、第二位は「解放感・安らぎとの関連度」(50.6%)であった²³⁾。すなわち、当時の日本人にとって脱履は、解放感や安らぎといった現実的な目的よりも、「けじめ」という文化的な目的で行われていたことを示していたのである。回答者の大半が主婦なので、家庭内の躰としての「けじめ」という意識が強とも考えられるが、多くの日本人にとって脱履とは「けじめ」であったといえる。

このような脱履と「けじめ」との結びつきについては、藁文化の研究で著名な宮崎清²⁴⁾(1996)も指摘している²⁵⁾。それは、米作りが基本の日本人にとって藁は神聖なもので、藁で作られた畳には神への畏敬の念となり、畳やゴザの上で「はきもの」を脱ぐことは根源

22) 中島一・松本壯次郎(1977)「住生活とはきものを脱ぐことに関する研究」(建築計画)『東海支部研究報告集』15、pp.113-116。質問紙調査法で行われた調査で、名古屋市の独立住宅と集合住宅に居住する計245戸から回答を得ている。回答者は30歳代が約半数をしめ、そのうち約80%の家族が夫婦家族で家族数3~5人の構成であった。

23) 選択回答で、はきものを脱ぐ行為と①自然環境の適合度、②現在の生活との適合度、③現在の住宅との適合度、④情緒・風情・伝統的なものとの関連度、⑤解放感と安らぎとの関連度、⑥けじめとの関連度、⑦日本人の清潔感との関連度、の7つの理由それぞれに、「非常にある」、「ややある」、「どちらとも思えない」、「ややない」、「非常にない」、「無回答」を選択するようになっている。

24) 宮崎清(1943-)、千葉大学名誉教授。生活文化や農村文化を専門とする。主な著書に、『藁』ものと人間の文化史55(1985、法政大学出版)、『韓国の藁と草の文化』(2006、印柄善著/宮崎清監修、朴燦一・尹明淑訳、法政大学出版局)などがある。

25) 前掲書、住友和子編集室・吉村明彦 pp.62-63。

的に神に対するマナーとしてのけじめであると述べ、ひいては、聖と俗・ハレとケの「けじめ」をつける「身と心を正す」作法であると考察している。

畳の使用は、そもそも高貴な者に限られていたことから、尊敬や尊重の一角と理解していたが、畳を構成する藁への畏敬の念であるという新たな視点であると感じる。しかし、畳の使用目的が座位や臥位であるという根源的な理由からすると、「はきもの」からの解放感を増長する柔軟性や肌触りの良さということ抜きにすることはできず、それは生理的欲求を満たすために「はきもの」を脱ぐということも否定できない。畳は日本独自のものであるので、日本人だけが感じる心地良さかもしれないが、文化的背景を基盤とした「けじめ」という目的に日本人の脱履の独自性なのである。すなわち、日本人の脱履には、心身一新の作用が存在するのである。

そしてさらには、日本人の脱履の行為は身投げ（自殺）をする際にまで至っていたことは、この行為の独自性の強さを象徴している。この際の脱履の目的は、私たちが現生で行う「はきもの」を脱ぐ際の汚れを入れないように、来世にも「はきもの」についた汚れをいれないためなのか、あるいはけじめなのかその分析は難しい。しかし、欧米社会では特に女性が人前で「はきもの」を脱ぐことに性的意味合いがあることと比べると²⁶⁾、同じ行為が文化によっていかに異なる意味をもつかかを象徴しているのである。これは、屋内で脱履の慣習の無い欧米社会での例であるが、同じように屋内での脱履の習慣があるアジア圏内との比較も次課題として追究していかなければならないだろう。

日本人の「はきもの」の着脱に関する先行研究の一つとしてあげた沢田（1996）の考察によると、日本人が「はきもの」の着脱によって各領域を使い分ける行動を誘発してきたという考察とは違った観点から考えると、日本人は足元から状況に対応する傾向ではないだろうか。そして、ここに日本人の「あしの文化」が象徴されているといたい。

そして、日本人にとっての「はきもの」の着脱が文化的行為として行われているということは、将来的にも消滅することはないに違いないが、今日のように生活様式や住宅環境が変わってもこの文化的行為を貫く際に、あらたな状況が生まれてくることになった。それは例えば、靴社会になると玄関口などにおける脱離の行為には、いろいろと手間かかるようになった。鼻緒のある日本の「はきもの」には後掛けがないので、脱ぎ履きに何の苦勞もなかったのであるが、靴の着脱には靴紐を緩めたり締め直したり、踵までしっかりと足を靴に入れたり時間を要するのである。その上、日本人は脱いだ「はきもの」を履きやすい方向にきち

26) 立川昭二（1996）『からだの文化誌』文芸春秋，p.100.

んと並べるといった後始末にも気を配らなければならない慣習があるので、玄関口での滞在時間が長くなる。その上、往々にして狭い玄関口では、複数同伴している時などには個人が靴の着脱に時間をかけづらいといった礼儀も大切にしなければならない。このように、靴社会における日本人の「はきもの」の着脱行為には、過去に存在しなかった状況に対応していかなければならなくなったのである。

この環境変化に適応させるために、現代の技術での興味深い商品が生み出されていることは興味深い。その商品には、靴紐の部分マジックテープにしたり、靴の側面や後方にチャックをつけたりして靴紐の処理の煩雑さを回避する策としている。あるいは、写真 1 のように見た目には靴紐をつけているようにみえるが実は紐ではなく、収縮機能をもったプラスチック製の紐状の棒を靴紐の穴にかけておくものなど²⁷⁾、文化的行為としての「はきもの」の着脱の継承を援助する商品なのである。



(写真 1)

このような商品開発にまで発展している日本人の「はきもの」の着脱は、まさに日本の「あし文化」を代表する一事象であるといえる。

日本人の「あし文化」を追究していくと、日本人の「あし」には日本文化の重要な一面である「ウチ・ソト」「上・下」概念が浮き彫りになっていることにも気づかされる。それは、本再考の焦点であった「上履き」という語にも明らかなように、「上」履きとその対と

27) この棒状のものを、対になっている紐穴とつりつけることで着脱の際に靴の甲の部分が伸び、手間をかけずに脱ぎ履きができるのである。商品名：結ばないからラクらくくつひもどきスニーカータイプ >

(SAKAI TRADING LTD.)、筆者撮影 (2016.5.13)。

して「下」履きの語の存在もその一例である。

「上履き」という語は、日本の建築構造上の特徴として、物理的に一段上がったところで履くという意味の「上」で履く「はきもの」ということで名付けられたものに違いないが、それに対して上に比べると、一段下がった下部で履く「はきもの」としての「下履き」という語がある。そして、「下履き」の同義語として「外履き」があるのだが、単純に「外履き」の対としての「内履き」という語は辞書に見当あたらず、厳密には存在しないのである。しかし、私たち日本人は「内履き」と言ってもあまり違和感がない。それは、日本人の「あし」が境界を越える際に「はきもの」の着脱を行う行為が、すなわち「内」と「外」という区切りを意味する語彙という解釈から受け入れることができるのであろう。さらに言えば、今日の日本の建築物には敷居も段差もない「バリアフリー (barrier free)」²⁸⁾が増えている環境では、一段上がった框で履く「はきもの」としての「上履き」というより、ただ単に「内」と「外」の境界の存在によって履く「内履き」と呼んだ方がしっくりとく世の中になっているからであろう。

【参考文献】

- エドワード・S・モース 『日本人の住まい』 八坂書房, p.225.
 栗山緑 (2013) 「日本人の「あし」文化の総合的考察 「はきもの」の着脱」 『比較文化研究』 No.109, pp.55-64.
 小松茂美編 (1985) 『慕婦絵詞』 続日本絵巻大成 4、中央公論社, p.70-71.
 小松茂美編 (1987) 『餓鬼草紙 地獄草紙 病草紙 九相詩絵巻』 日本の絵巻 7 中央公論社, pp.6-7.
 真保亨編 (1974) 『法然上人絵伝』 日本の美術 第95号, 至文堂, p.62.
 住友和子編集室・吉村明彦 (1996) 『日本人とすまい①靴脱ぎ Kutsu-Nugi』 リビングデザインセンター株式会社, pp.62-63, pp.92-93.
 竹内重雄 (1987) 『大正風景スケッチ 東京あれこれ』 国書刊行会株式会社, p.137.
 多田道太郎 (2002) 『からだの日本文化』 潮出版社, pp.159-162.
 立川昭二 (1996) 『からだの文化誌』 文芸春秋, p.100.
 中高一・松本壯次郎 (1977) 「住生活とはきものを脱ぐことに関する研究」 (建築計画) 『東海支部研究報告集』 15, pp.113-116.
 『日本国語大辞典』 (2000-2002) 小学館、Japan Knowledge
 (<http://japanknowledge.com/psnl/search/basic/>)

28) 障害をもつ人々が、生活環境 (住宅、地域施設、交通施設) において、普通に生活することを阻んでいる障壁 (バリア) をなくすこと (『日本大百科事典』 (前掲 website <http://japanknowledge.com>、参照 2016.6.4.).

- 『日本大百科全書（ニッポニカ）』（1994）小学館、Japan Knowledge
(<http://japanknowledge.com/psnl/search/basic/>).
- 平出鏗二郎（1983）『東京風俗志』日本図書センター，p.78
- 増谷文雄（2005）『正法眼蔵（一）』講談社，p.116，pp.122-123
- Morse, Edward S. (1998) "Japanese Homes and Their Surroundings": Charles E. Tuttle Company, Inc., p.230.

論文投稿日：2016. 06. 05.

論文審査日：2016. 07. 25.

掲載確定日：2016. 07. 27.

<要旨>

日本の「あし文化」の多角的考察
日本人の「はきもの」の着脱 2

栗山緑

本研究は、人の「からだ」を文化の表象体という視点から、日本人の「あし」に注目している。本稿において「はきもの」の着脱に際して用いられる「上履き」（室内用の「はきもの」）について論考した。その結果、日本人は、室内（ウチ）では「はきもの」を脱ぐ慣習がありながらも、上履き着用の歴史は古く、現代に至っては数種もの上履きの着脱を繰り返すほどになっている。

そして、上履き着用の要因については、日本建築の構造上の理由からの保温目的と日本人の高い衛生感覚を挙げた。また、多くの現代日本人にとっての上履き着用は、その目的をあまり意識することなく習慣化されたものであることを明らかにし、空間毎に「はきもの」を替える傾向を持つまで進展していることを指摘した。

本稿においては、「上履き」を「履く」という観点から日本人の「はきもの」の着脱の再考となったので、更なる課題として「はきもの」を「脱ぐ」という観点からの追究の必要性が示唆された。

The comparative study of Japanese 'Foot culture'
- The act of shoes wearing and off II -

Kuriyama, Midori

This study is based on the viewpoint of the human body as a symbol of its culture and focused on Japanese legs and feet. In this paper I reconsidered about Japanese acts of shoes wearing and off by investigating indoor-shoes (slippers). As a result, Japanese have a long history of wearing indoor-shoes while they have a custom to remove shoes for indoor. And modern Japanese continues this custom of wearing slippers when indoors.

I suppose that their original reason of wearing indoor shoes was to get warm because of the function in Japanese traditional house and also Japanese high level of hygiene. For most modern Japanese wearing indoor shoes became a custom without being aware of its purpose and they developed this custom to have a tendency of changing shoes for each space which was divided by a line.

I concluded that investigating Japanese act of shoes-off was also needed for research of Japanese foot culture.